

# 教科横断型授業実践〈美術科×国語科〉

— Art と言葉 —

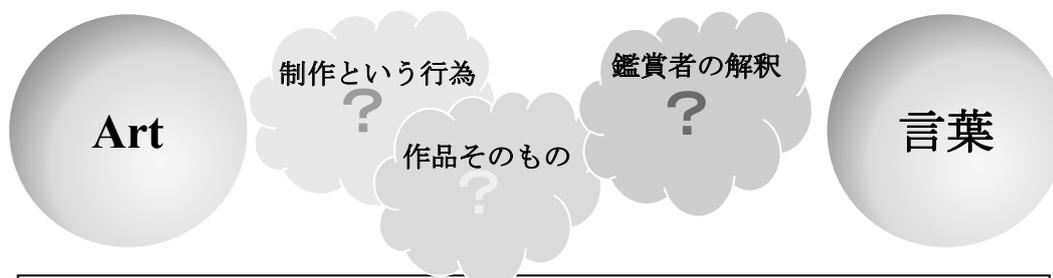
## A Report on the Practice of Cross-Curriculum Learning 〈Art and Design × Japanese〉 -Art & Words-

国語科 畑 綾乃

美術科 小松 俊介

### 1. はじめに ～〈美術×国語〉の授業構想～

小松（美術科）と畑（国語科）が互いの科目について話す中で、実技科目である美術科においては、芸術体験に関わる内化、外化の深まりに、高いレベルでの言語化を伴わせることが大きな鍵となるのではないかという問題意識が提示され、また言葉を扱う国語科においては、言葉の力を高める上で体験的な活動による実感が重要であり、生きて働く言葉の力と身体性との関わりを考えていくべきではないかという課題が意識化された。そこで、芸術体験を軸に、Art と言語の関わりについて生徒が思考を深めることを目的とする本授業を構想するに至った。それぞれの科目担当としての得意分野を生かして活動の意義を深めるにはどう組み立てればよいか、ミーティングを重ね、アイデアを出し合った。



#### 〈 単元全体の流れ 〉

導入	写真作品の鑑賞 Ryan Gander 「My Family before Me」
Work 1	Giussepe Penone 作品の紹介文を書く（1）想像して書く
Work 2	Giussepe Penone 作品を追体験する（模刻）
Work 2	Giussepe Penone 作品を追体験する（着彩）
Work 3	Giussepe Penone 作品の紹介文を書く（2）経験を踏まえて書く
講義	「Art×言葉」というお題でクロストーク
課題	「Art×言葉」というお題で自由に文章を書いて提出する。

### 2. 実施内容

#### 2. 1 単元の枠組

単元名：「Art×言葉」

日時：2021年2月18日、25日、3月4日（木）

対象：美術Ⅰ選択者（高校1年生18名）

場所：筑波大学附属高等学校 美術教室

授業者：小松 俊介（美術科教諭）畑 綾乃（国語科教諭）

## 2. 2 単元設定の理由

国語科と美術科の立場から互いの強みを生かした鑑賞の授業を設定した。題材は、Art と言葉（言語活動）の関わりそのものに焦点を当てることとした。美術に対して苦手意識を持つ生徒からは、「自分は絵がヘタだから」、「美術のセンスがない」などの発言をよく耳にする。こうした発言からは、彼らの持つ美術の領域の狭さや、「美術は感覚的な領分であり立ち入る事ができない」かのような認識が垣間見える。指導者の見解では、例外もあるが多くの場合制作や鑑賞の際に感覚と言語による思考は両輪で働いているものと捉えている。この言語化のプロセスや言葉で考え、想像を膨らませることによって“造形的な見方・考え方”が深まる点に注目し、授業を構成することとした。また、鑑賞のプロセスを記述しながら進めることで、生徒自身が生きて働く言葉の力を経験的に高めるとともに、自分の気づきをメタ認知できる。さらにその経験が、今後の制作と鑑賞を豊かにするとともに、言葉の力について考えを深めるようになる、という相互作用にもつながると考えた。

## 2. 3 年間指導計画における位置づけ

授業は、美術選択者の授業において実践することとした。アトライティングの授業における本格的な導入は1年目である。また、授業対象は1年次生徒18名である。今回は、「補助的アトライティング」と「複合的アトライティング」（直江俊雄「後期中等教育におけるアトライティング-エッセイコンテストの創設における運動展開」『美術科教育学会誌』30, 2009, pp253-264）に着目し、春休み課題の「アトライティング」へとつなげる。また、抽象概念を獲得していく2年次においても引き続きアトライティングを授業へ取り入れ、定点観測的にフィードバックを行いたいと考えている。

## 2. 4 単元目標

- ・ 作品の鑑賞において、自分なりの解釈や思考を深めながら作品を味わうことができる
- ・ 作品の制作意図を想像して、自分なりの「意味や価値」を見出すことができる。
- ・ 独自の視点や構成を意識して、より適切に言語化することができる
- ・ Art と言葉の関わりについて各々の考えを深める

## 2. 5 評価規準

ア 関心・意欲・態度	イ 読む力、及び、発想や構想の能力	ウ 書く力、話す力、及び、創造的な技能	エ 鑑賞の能力、及び、書く力
①自分なりの解釈や思考を深めながら作品を味わおうとする。 ②自分の感性、思考を言葉で表現しようとする ③他者の感性を理解しようとする。	①作品をよく観察した上で客観的な情報から独自のアイデアを発展させることができる。 ②作品以外の要素と関係づけながら鑑賞を深めることができる。	①紹介文1を書く際、視点や構造を意識して表現することができる。 ②紹介文2を書く際、制作プロセスから思考を発展させた見方・感じ方を表現することができる。	①他者の解釈や紹介文に興味関心を持って鑑賞し、自分の意見を言語化することができる。 ②鑑賞の言語化のプロセスを振り返り、各々Art と言葉について考えを深め、言語化することができる。

## 2. 6 単元指導計画

時	学習の流れ	学習活動・指導上の留意点	評価方法
1	<p>●導入：鑑賞 題材：Ryan Gander「My Family before Me」(写真作品)</p> <p>写真作品の鑑賞・分析をする</p>	<p>◇一つの写真作品について、鑑賞する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・問いを立てていく。ワークシートに書き込む。</li> <li>・「写真として見る」のと、「作品として見る」のとの違いを考える</li> </ul> <p>◇タイトルを知り、タイトルと作品の関係について考える</p>	<p>活動の観察</p> <p>記述内容の確認</p>
2	<p>●Work1：鑑賞・記述(紹介文1) 題材：Giussepe Penone「川になる3」(石彫作品・題名は伏せる)</p> <p>題名が伏せられた石彫作品「X」の紹介文1を書く</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作品についての情報を聞き、言葉と作品の関係について考える</li> </ul> <p>◇芸術作品の紹介文について知る</p> <p>→藤田嗣治の自画像に関する複数の紹介文を例に内容、構成、表現について説明する。</p> <p>◇作品「X」(石彫)について、題名や作者等の情報を持たず、作品写真のみ見て紹介文を書く</p> <p>→作品を観察して分析しつつ、自分の想像を元に、自由に書いて良いことを指示し、机間巡視やコメントによってその雰囲気作りをする。</p> <p>◇互いの紹介文を共有し、感じたことをワークシートに書き込む。</p>	<p>活動の観察</p> <p>記述内容の確認</p> <p>記述内容の確認</p>
3	<p>●Work2：制作(模刻) 題材：Giussepe Penone「川になる3」(石彫作品・題名は伏せる)</p> <p>作品「X」制作プロセス体験① 石彫作品を紙粘土で模刻をする</p>	<p>◇作品「X」の作家になったつもりで模刻することで作品制作を追体験する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実際には石で作られているが、紙粘土を使って同じ形になるように象り、彩色を行う。</li> <li>→作品の制作過程について、2つある石のうち1つは自然の石、もう1つは、同じ組成の石を全く同じ形に彫刻している、ということのみを伝える。</li> <li>→実際の石彫による制作過程を想像できるように、石と鑿(のみ)を使った石彫を少し体験させる。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・制作しながら作家の行為や制作意図に考えを巡らし、過程の中で浮かぶ問いや考えを、ワークシートに言葉で記録していく。</li> <li>→そっくりに作ることのみが目的化しないように注意させる。</li> </ul>	<p>活動の観察</p>
4	<p>[続き]：制作(着彩) 題材：Giussepe Penone「川になる3」(石彫作品・題名は伏せる)</p> <p>作品「X」制作プロセス体験② 模刻した紙粘土(石の模刻)に彩色する</p>	<p>◇作品「X」の紹介文2を書く。</p> <p>→制作のプロセスや、その中で浮かんだ問いや考えに着目させながら書かせる。</p> <p>◇互いの紹介文を共有し、感じたことをワークシートに書き込む。</p> <p>→初めに書いたものとも比較考察させる。</p>	<p>活動の観察</p> <p>記述内容の確認</p>
5	<p>●Work3：記述(紹介文2) 題材：Giussepe Penone「川になる3」(石彫作品・題名は伏せる)</p> <p>再度、模刻の経験をふまえて作品「X」の紹介文を書く</p>	<p>◇「Art×言葉」をテーマにした、美術科からの講義を聴く。</p> <p>◇「Art×言葉」をテーマにした、国語科からの講義を聴く。</p> <p>◇「Art×言葉」テーマにクロストークを行い、その中で考えたことをワークシートに書く。</p>	<p>活動の観察</p> <p>記述内容の確認</p>
6	<p>●まとめ：講義(クロストーク)</p> <p>「Art×言葉」をテーマに美術科と国語科双方より関連事項を提示して、講義と対談を行う</p>	<p>◇「Art×言葉」をテーマにした、美術科からの講義を聴く。</p> <p>◇「Art×言葉」をテーマにした、国語科からの講義を聴く。</p> <p>◇「Art×言葉」テーマにクロストークを行い、その中で考えたことをワークシートに書く。</p>	<p>活動の観察</p> <p>記述内容の確認</p>
事後課題	<p>●課題：アトライティング</p> <p>「Art×言葉」というテーマで、1,200字程度のエッセイを書く</p>	<p>◇アトライティングをする。</p> <p>「Art×言葉」をコアテーマとし、具体的作品を何か取りあげて、体験等に基づいてエッセイを書く。(1,200字程度を目安とする)</p>	<p>記述内容の確認</p>

### 3. 授業の実際

#### 3. 1 第1・2時 鑑賞・記述

##### 3. 1. 1 導入 写真作品の鑑賞・分析をする

- 1) 生徒に1枚の写真を見せる。それは、写真作品（Ryan Gander「My Family before Me」）であるが、その作者・タイトル・作品の背景に関する情報を生徒には明かさない。その写真について、問を立てて、ワークシートに書き込んでいく。

▶実際の作品は、大人の男女と女の子が写っている写真。著作権都合上、作品概要が伝わるように筆者が加工した。



- 2) その写真が一つの作品であることを知らせ、作品として見たときに浮かぶ問いを、ワークシートに書き込ませる。生徒の記述は以下のようなものであった。写真として見たときと作品として見たとき、それぞれどんな問いが出たかを比較することで、「写真として見る」ことと、「作品として見る」こととの違いを考えさせる。

#### 【写真として見たときに生じた問い】

- ・写っている3人の人物について

服装、国籍・人種、年齢、髪型、表情の理由、人物関係…

- ・写真としての概要

どこなのか、誰が取ったのか、どの時代の写真か、どの季節か、構図の意図…

#### 【作品として見たときに生じた問い】

- ・作品の概要について

タイトル、題名は何か、できた背景は何か、壁に掛けてみるのか上から見るのか、生まれた文脈はどのようなものか、連作の一つなのか、いつ発表されたのか…

- ・作品の解釈について

何を伝えたいのか、意図は何か、その意図は●●ではないか、絵画や彫刻ではなくありきたりに見える写真が作品なのか、白黒の割合に意味はあるのか、何かの暗示か、本当に写真なのか絵画ではないか、なぜこの構図にしたのか、やや斜めであるのにはどのような意味があるのか…

- ・作者について

作者は有名な人か、作者と写る人物の関係は何か、作者の人生にどのように関係するのか、この作者の他の作品はどのようなものがあるか…

### 3. 1. 2 Artと言葉の関係性について考える

1) 生徒に作品のタイトルを知らせる。生徒は、タイトルを知り、その上で作品についてさらに鑑賞し、問いを立てながら作品の解釈やコンセプトについて考察する。授業者から、「作品タイトルから想像することは何か」、「作品タイトルを知って作品の感じ方や生まれる問いはどのように変わったか」、「日本語のタイトルを付けるならばどんな言葉にするか」などの問いかけをする。生徒は、感じたことをワークシートに書き込んでいく。

作品	タイトル(言葉)	作者情報(言葉)
	<b>My Family before me 2006</b>	 RYAN GANDER 写真右が作者。左が姉。作品写真は、作者が生まれる前の両親と姉が写った家族写真。作者は、先天的に足に障害を持ち、長く車椅子での生活を送っている。
作品の客観的 情報 自由な想像	タイトルとの 関連付け	作者の経歴 社会背景 鑑賞者との関係
主題 コンセプト 意味・意図		

【生徒の作品解釈の変化】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 幸せ家族</li> <li>・ 団結力</li> <li>・ 家族とは</li> </ul> <p>※問いは広く多く生まれるが、作品の意味を見出して解釈を確定させる言葉はあまり出ない。自由な発想で推察を進めている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 先祖の姿</li> <li>・ 結婚相手の結婚前の家族</li> <li>・ 死別した家族</li> <li>・ 時の流れ</li> <li>・ 未完成の家族</li> <li>・ 私が自我を持つ前</li> </ul> <p>※タイトル(言葉)によって新たな観点を獲得して解釈を進めている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分の知らない家族の一面</li> <li>・ 自分が生まれていなかったら</li> <li>・ 自分がこの世界に来るための架け橋</li> <li>・ 自分が入る場所(作品の左下の空間)</li> <li>・ 自分は決して体験できない世界</li> <li>・ 家族は今も幸せなのだろうか</li> <li>・ 自分はこの母の中に既にいる</li> <li>・ 「いない」ことで「いる」</li> <li>・ 自分の存在意義とは</li> <li>・ 幸せの形の変わり方</li> <li>・ 自分の知らない何か</li> <li>・ 家族という認識</li> <li>・ 新鮮な興奮</li> <li>・ 疎外感</li> </ul> <p>※追加説明(言葉)によりある種の枠を得る。「枠の中で広げる」という思考に移行して、解釈を深めている。</p>
--------------	--	---	--

#### 【生徒の出した日本語のタイトル案】

私が生まれる前の家族／私がない／以前の家族／私のいない家族写真／私がいなかった頃／私だけがない家族写真／私の知らない家族の一面／今までの私の家族／僕が生まれる前の僕の家族／ふりかえる(振り返る・振り替える)ことのない家族

2) 「見る」と「鑑賞する」の違いについて考える。実感の中で考えた違いを言葉で表現する。

#### 【「見る」とは】

眺める、視野に入る、という行為のみ／自分の経験と直感で表面的情報を読み取る／感覚的感想を持つ／素直な感想を持つ／観点を意識しない／見えるものを見る……

【「鑑賞する」とは】

分析・考察・評価をする／周辺情報を考え合わせてメッセージを読み取る／自分の心情も反映して意味づけをする／多面的に見る／作品を通してその奥の世界を想像する／観点を意識する／見えないものを見る／深い部分を知ろうとする……

【生徒のワークシート記入例】

A r t × 言葉

◇ ひとつの写真

どい？  
なんで？  
小さい景色の前とか  
じゃあなに。

作者？  
僕でもとれそう写真。  
なにを伝えている？  
身近。作者との関係  
→ RYAN GANDER

My family before me.

白黒 → 昔？  
親の顔のせい。  
年が経てばいい？

エモそう  
外国。  
普通 → 素？  
作品だと思いたから撮ったの？

→ 和代住まう前の私の家族。  
先祖 先代。 (和代結婚する前の相手の家族)

自分の知らない世界 かつ体験ではない世界  
どい？ 小さい前。 誰か自分知らん。  
疎外感 → 自分から世界に  
来るための架橋  
自分ととって神のよう。

✓ 見る look watch  
興味がある  
すべしは忘れる。

✓ 鑑賞する appreciate enjoy  
興味深い。  
背景を知り。  
考える  
理解しようとする。

◆ 作品×言葉 について 感じたこと・考えたこと

作品だけじゃその作品を理解できない。言葉だけで想像しにくい。作品と言葉が助け合っている感じがした。  
2つが合わさったときに、自分の想像がぐんぐん伸びて、そこで「X」と納得した。9月11日。作者にヒントをあたっているように感じた。

3) ひとつの写真から段階的な情報を得ながら鑑賞する活動の中で「作品×言葉」について感じたこと、考えたことをワークシートに記述する。生徒達はそれぞれ、視点を与える・媒介するという言葉の役割、作る側と見る側両方の言語化の意義、そしてその難しさと大切さ、作品に加わる言語情報のメリットとデメリットなどについて、自分の考えを述べていた。

### 【生徒記述より抜粋】

- ・タイトルも含めて「作品」だと感じた。先入観を持ってほしくなかったり自由に考えてほしかったりするときに「無題」にするのではないかと考えた。
- ・言葉が加わることで作品としての重みが出る。言葉を加えるほどに解釈の幅が少しずつ狭まる。しかし深く考えられる。
- ・作品は、その絵・写真だけでなくタイトル、作者の背景など全てが作品だと思った。
- ・作品と言葉が助け合っていると感じた。2つが合わさった時に、自分の想像が大きく働いて、+（プラス）ではなく、×（カケル）だと納得した。タイトルによって作者にヒントを出されているようで面白かった。
- ・言語によって情報が追加されると作品の印象がガラッと変化する。言葉選びは慎重に行うべきだと思った。言語によって伝えられる概念が変化するので難しい。
- ・自分の直感で「見る」ことは、題名等の言葉を知って「観る(鑑賞する)」ことをした後には最初の「見る」に戻れず、たった一度しかできないので、最初の「見る」も大事だと思った。
- ・タイトルや言葉は、作品を鑑賞するための糸口のようなものになっている。
- ・作品そのものを見ただけの方が解釈の幅が広く自由である。その作品を自分に沿ったものにできる。言葉による情報は、理解を深めることができるが、時に固定観念を持たせてしまうこともある。
- ・タイトルを知って初めて感じる疑問(問い)があったりした。自分の想像が膨らみ、作り手のメッセージが伝わりやすくなる。作品そのものに言葉はないが、感じたことを言葉にするのは鑑賞する上で大切だと思った。
- ・タイトルによって作品を捉える観点が見えてくる。言葉が作品に深みを持たせる。
- ・その作品に言葉（タイトル）が入ることによって作品の書くに近づける。作品名の無いもの（無題など）の場合、作者は見る側にいろいろ自由に想像を膨らませてもらいたいのではないか。
- ・作った側が考えてほしいことを考えてもらえる。受け取る側が「正しい解釈」に縛られてしまうのではないか。

授業の進め方としては、大きな流れや作業の指示と作品に関する事柄は小松（美術科）、言葉や言語化に関する事柄は畑（国語科）が担当した。補足説明、活動を促す声かけ、教員同士の掛け合い（互いに質問し合うなど）、などの対話を頻繁に入れていった。また、生徒が各自で考察・記述をしている間にも2人で机間巡視を行い、美術科と国語科それぞれの観点から生徒との対話や即時コメント（評価）を行った。生徒に多様な視点を与えられる、多面的に評価を示せるという点は異教科複数教員による授業ならではのものであり、生徒の思考の活性化に有効であると考えられる。

### 3. 1. 3 **Work1** 作品「X」の紹介文1を書く

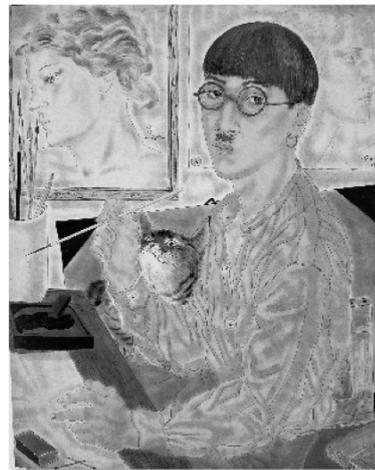
- 1) 作者、タイトル等のわからない1つの作品について紹介文を書く活動をするを伝える。紹介文を書くにあたって、生徒が紹介文の具体的な書き方をイメージできるようにするために、まず畑(国語科)より作品の「紹介文」について講義をする。紹介文とはどのようなものかについて、実際の美術館や美術雑誌における作品の紹介文を例に、紹介文に書かれている内容、構成、表現等の特徴に視点を置いて説明する。取りあげた紹介文と、紹介文を書く際に意識するポイントとして生徒に話した内容は、以下の通りである。

#### 【紹介文について】

- ・ 紹介文とは、その作品を言葉で説明、紹介する文であり、その文を読むことで鑑賞者の作品の見方や感じ方が深まることを目的とするものである。
- ・ 紹介文を書くときに考えるポイント
  - ① 対象：誰に向けたものか(一般の人、美術に興味のある人、美術を学ぶ人、芸術家、全く美術に興味の無い人、画商など)
  - ② 目的：どのような目的か(興味を持ってもらいたい、深く味わってもらいたい、芸術的価値を伝えたい、親しみを持ってほしいなど)
  - ③ 内容：どんな視点を与えるか(絵の中身自体についての分析・解釈などの解説、作家の人物像・作風・人生や成立の文脈、社会的背景等の紹介など)
  - ④ 程度：どの程度か(詳しさ、専門知識、主観-客観、解釈の幅、分量、どこまでの情報を提示し、どこから見の人に委ねるかなど)

#### 【上記ポイントを意識して既存の紹介文を読む】

右の絵、藤田嗣治「自画像」(1929)の紹介文を5種とりあげ、どのような内容が書かれているかを読解する。



#### ●資料1

『別冊太陽 藤田嗣治 筆一本で世界に挑む』監修佐藤幸宏 2019年2月

#### 自画像

1929年 東京国立近代美術館蔵  
藤田嗣治(以下、フジタ)は自画像を数多く残した画家である。しかし、その作品には、レンブラントやゴッホの自画像に見られるような、内省的な傾向は希薄である。独特な風貌や日本人であることを強くアピールする筆や硯など、そこから画家のイメージ戦略が窺われる。(佐藤)

Photo: MOMAT/DNPartcom

※☆：周辺情報、作者の人物像・作風・人生や成立の文脈、社会的背景の紹介などの「外側」情報。  
★：絵に描かれる内容やモチーフ等の解説、絵自体についての分析・解釈などの「内側」情報。

- ① ☆自画像を多く描いたという、作家と自画像の関係を述べている
- ② ★同じく自画像を多く描いた海外の画家と対比させて絵のモチーフからその特徴を説明している

●資料2 『没後50周年 藤田嗣治展』 展覧会図録 監修林洋子 2018

おかっぱ頭に丸メガネ、ちょび髭、金のピアスといった藤田定番の個性的な風貌で描かれた自画像。左頁の下絵 (cat. no. 28) で描かれているのは人物部分のみであるが、本作では独自の乳白色地に墨色の細い線で描くスタイルを生み出した画家の特徴を盛り込むように、面相筆と硯の他、背景の壁の女性像と猫という人気のモチーフが加えられている。16年ぶりの一時帰国を果たした1929年の第10回帝展に出品された。(KS)

- ①★描かれている作家の個性的風貌を説明して作家の個性に注目させている
- ②★下絵と本作との比較により、作家がアピールしたいポイントや独自の制作スタイルを説明している
- ③☆海外を拠点にした作家の人生とその作品を徐々に日本で出品したという文脈、当時の人気のモチーフであったことを知らせている

●資料3 『生誕120周年 藤田嗣治展 パリを魅了した異邦人』 展覧会図録 尾崎正明、蔵谷美香 2006

コラム 「自画像」

藤田は比較的多くの自画像を残した画家だ。パリで制作された《アトリエの自画像》(cat.no.29)や《自画像》(cat.no.37)には、日本画の刷毛や面相筆、墨や硯、デッサン挟みや油絵の木枠が細かく描きこまれている。藤田は猫をはべらせ、床にあぐらをかき、日本画の画材を使って制作していた、あるいはそのような画家として自分のイメージをアピールしたいと思っていたのだ。実際藤田の自画像には、インテリアや小物によってその時々の藤田像を演出するよう趣がある。ずっと後の作品だが、日本帰国後に描かれた《自画像》(cat.no.61)の背景は、おそらくそのころ住んでいた四谷左門町お岩様横丁の家で、一転して豊に火鉢の日本風である。また《我が画室》(cat.no.62)、《私の画室》(cat.no.65)を見てみよう。前者はお岩様横丁に移る前にいた、義兄中村緑野邸内に建てたメキシコ風の住まい、後者はその後麹町に建てた純日本風の住まいである。インテリアと自己イメージが一体化する藤田の性質を考えるなら、これらの作品も一種の自画像と言えるかもしれない。(MK)

- ①☆自画像を多く描いた作家であり、本作品がその中での一枚であるという位置づけを述べている
- ②☆この作品はパリで描いたということを知らせている
- ③★描かれる作者の作品制作スタイルの分析と、そのスタイルをアピールするという作家の意図を説明している
- ④☆自画像制作においてその時々の人物像をインテリアや小物で演出するという作家の制作傾向を説明し、他作品によってそのエビデンスを提示している

●資料4 『藤田嗣治 どうぶつものがたり 猫と裸婦と画家』 展覧会図録 公益財団法人平野政吉美術財団 2014

3 《自画像》1929年 81.0×65.0 油彩、金箔・キャンバス 名古屋市美術館

壁には裸婦の素描が飾られ、机上には墨や硯、面相筆を揃えた藤田、そして一本牙の猫が描かれている。同年に描かれた2作品は、ほぼ同じ構図で描かれた作品である。

藤田は生涯数多くの自画像を遺している。パリで画家としての地位を確立した1920年代には、アトリエのなかの自画像を多作した。

1921年のサロン・ドートンヌに出品された《自画像》(1921年、ベルギー王立美術館)では、整頓された調度を背景に、きちんと手をそろえて正面を見据えた几帳面な藤田の姿が描かれた。猫はおらず、どこか陰鬱な雰囲気漂っている。一方、《アトリエの自画像》(1926年、リヨン美術館)では、頬杖をつくメランコリーなパターンながら、寄り添う猫とともに明るい表情の画家が描かれている。雑然とした室内が、猫との暮らしを楽しむ藤田のリラックスした日常を映し出している。

この2点に登場する猫は《アトリエの自画像》と同一の猫である。画家の腕越しや腰の後ろなど、いずれも顎を上げ一本だけ牙をのぞかせて、画家にびたりと寄り添っている。藤田お気に入りの猫であろう。猫と藤田の親密さを窺わせる作品である。(I)

- ①★客観的な構図を説明している
- ②☆様々な自分の姿を見せる自画像を多く描いたという、作家としての人生と自画像の関係を知らせている
- ③★モチーフの猫の説明と、☆作家と猫の関係を説明をしている

●資料5 『藤田嗣治 世界への扉を開いた日本の画家 現代アーティストが解き明かす、作品と人生』 美術手帖 2018年8月号増刊

「自画像」という絵画には、たぶん2つのタイプがあって、ひとつはレンブラントの自画像のように、自分を見つめ、自分を掘り下げ、それを描くというもの。それは誰かに見ってもらうことすら考えていないかもしれない、純粹な描くことの衝動による絵だ。もうひとつは、自分の姿を描くことで、自分の存在やキャラクターをアピールし、自分の絵画世界のレパートリーのひとつとして、自分のことを宣伝するもの。アンディ・ウォーホルの自分をモデルにした作品などがそうで、藤田嗣治の場合も、これに当てはまる。

藤田は、自己演出をした。その戦略として、ロイド眼鏡、チャップリンのようなヒゲ、耳にピアス、腕時計の刺青、それにオカッパ頭と、自身のキャラクターをつくり上げ、その「宣伝」としての役割の自画像世界をつくり出した。しかも、たんにインパクトのある風貌をつくっただけではない。その自画像をみると、手

に筆を持ち、壁には絵がかけられている。自分が画家であることをしっかりアピールしている。さらに、手に持っている筆をみると、それは油彩画の筆ではなく、日本画の面相筆だ。机の上には、墨の入った硯が置かれている。藤田は、驚くべき技法で細い線を描ける、日本から来た「線の画家」であることもアピールしているのだ。そして、その藤田の企みは成功した。当時のパリでは、藤田の格好をしたマネキンが流行ったし、「画家フジタ」は、パリでいちばん有名な日本人となった。

そのような藤田のトレードマークは、自画像の絵画だけでなく、静物画のような絵でも、さりげなくアピールされた。この《私の部屋、目覚まし時計のある静物》には、丸眼鏡が置かれている。それだけで、自画像ではないが「藤田の自画像」になっている。

- ① ☆自画像というものの自体を分析及び類型化した上で、本作品を位置づけている
- ② ☆本作家自身の人生における自己演出について説明している
- ③ ★本作品における自己演出のポイントとそれに対する評価を述べている
- ④ ☆静物画等においても小物のモチーフで自己アピールをするという作家の制作の特徴を説明している

2) 作品「X」の紹介文を書く。題名が伏せられた石彫作品（下写真）は、同じ形の石が並んだもの。生徒には、写真を示した上で、「(河原にあるような) 全く同じ形の石が2つ並んでいる」という説明以上の情報は伝えない。作品を観察して分析しつつ、自分の想像を元に、自由に書いて良い。授業者2人で、机間巡視やコメントをしながら、自由な発想で書いてよいという雰囲気作りをする。生徒は各々想像を膨らませながら解釈を加えていた。完成した生徒の記述は、同じ作品に1つとして同じ意味を見出しているものではなく、様々な次元と発想で対象を捉えており、大変バラエティに富んだものであった。全員のものを各机の上に置き、互いに読み合う活動を行ったところ、生徒達自身もその違いに驚きながら、共有活動を楽しんでいた。書かれた紹介文の評価については、全ての紹介文を並べて授業者2人でよいと思われる点を出し合って加点していくという方法で行った。2人の各教科特性による評価軸は当然のことながら違いがあるのだが、具体的にそれを出し合って生徒の記述を一つ一つ見ていくことは互いに新鮮な視点を得られて楽しい作業であった。

●小松の着眼点：独自の感性による視点、作家の本来の意図との差違、些細な言葉の中(美術科)

にどのようなセンスが光るか、着目点(作る過程か、できあがったものの自体か、材料か、など)メタ的発想の要素があるか……

●畑の着眼点：詳しい観察や独自の視点を表現しているか、見出したテーマの感銘度、(国語科)

タイトルの良さ、伝え方の上手さ、論理性やわかりやすさ、文体の工夫や語りかけのうまさ、言葉選びの良さ、全体の文章構成……

【生徒のワークシート記入例】

Title: 調和

これら2つの石は全く同じ形をしているが、そのためには  
双方を細かく削って長い時間をかけて調える必要がある。

人間同士も同じで、2人の人間が同じ空間に存在するためには  
お互いが少しずつ自分のしたいことと相手のしたいことをかまみして、

できあがらないうちに長い時間をかけて調和していくことが  
必要だ。長い年月連れ添う夫婦などがその典型だ。

この作品は、そうやって調和した2人の人間の姿を表している  
と考えられる。

できあがるということは自分を押し殺すということではない。この  
2つの石も同じ形をしてはいるものの、それぞれが重みも存在感  
も持っている。

共存のための調和。その極地に達した2つの石への作者の憧れが  
この作品から感じられる。

Title: そりえり

二つは全く同じ形の石になっている。色、形  
すべてが同じである。自然にできた石が全く  
同じ色、形であることは有り得ないので、  
片方がもう片方に切る、けずるなどして揃えられた  
のだろう。石という抽象的かつ自然物を

材質に選ぶことで、社会、特に集団社会で、  
角がけずりとやら、同じ形にされていく人を  
比喻しているのではないだろうか。人を

「角がとれた」、「丸くなった」というように、  
この石も丸みを帯びていくものになっている。

ただ、石を作品の中心にする事で、  
観賞する人の想像を促すことかできている。

この解説も一観賞者の妄想にすぎず、  
他の人は別のことを考えにがもしれない。

Title: 作品鑑賞のすすめ

この作品は同じ形の石を少し角度を変えて撮った作品だ。本来同じ形の石を撮ったのだから全く同じように写るはずなのに角度を少し変えただけで、石の大きさや表面の凹凸が異なっているように見える。また石の大きさも異なっているように見える。この作者は2つの全く同じような石を少し視点を変えて撮ることによって作品鑑賞の際に異なる視点でみとみると全く別の作品が生まれるということを伝えたからたのびと思う。また石をモチーフにしたのは、ありふれた物でも美術作品になる。美術は身近なもので気楽に見てもいいのだということも伝えたからたのび考える。もう少し視点を変えてこの何の点もない2つを見てみよう。たとえば石の裏側はどうか、というだろうか。もしかしたら全く別の形状になるかもしれない。大きさはどれくらいだろうか。実はこの石、1つあたり40cmもある巨大な石である。先入めは先入 在界にとらわれず、目に見えているそのだけでなく、見えていないところも想像して美術作品を鑑賞しようという作者の意図が伝わってくる。この作品は、美術作品を通じてこの作品の魅力を、あつことを意図した作品であると考える。

【作品「X」紹介文1のタイトル一覧】

- ・生徒A 一卵性双生児
- ・生徒B 生き別れの双子
- ・生徒C 千〇万〇
- ・生徒D 同じ石
- ・生徒E 宝物
- ・生徒F 不自然な石
- ・生徒G 影
- ・生徒H 石・石
- ・生徒I 真実はどっちなのか
- ・生徒J 真偽の区別
- ・生徒K どっちが粘土で作ったものか
- ・生徒L 「同一」の石
- ・生徒M 1この石
- ・生徒N 調和
- ・生徒O 2つの石の違い
- ・生徒P そろえる
- ・生徒Q 作品鑑賞のすすめ

具体的  
個別的

一般的  
抽象的  
メタ的

〈書かれた作品コンセプトの内容〉

- ◀ 作り手自身の境遇を作品に重ねたもの
- ◀ 作り手が自分という存在と作品を関係づけるもの
- ◀ 人間というものの存在を考えさせるもの
- ◀ 「同じ」という概念を問い直させるもの
- ◀ 石を同じ形にするという制作過程の行為に意味を見出すもの
- ◀ 作品を鑑賞するという行為について意味づけをするもの

### 3. 2 第3・4時 制作（模刻と着彩）

#### 3. 2. 1 **Work2** 作品「X」の制作プロセス体験をする

1) 石彫作品である「X」を模して、作家になったつもりで制作する。作品の制作過程について、「作品の中の2つある石のうち1つは自然の石、もう1つは、同じ組成の石を全く同じ形に彫刻している」ということのみ生徒に伝える。実際の石の模刻を生徒が行うことは時間や技術の都合上難しいので、自然の石と同じ形を紙粘土で模刻する作業を行う。実際の石彫による制作過程を想像できるように、大理石を教室に用意して石と鑿(のみ)を使った石彫を少し体験させる。制作しながら作家の行為や制作意図に考えを巡らし、作家の込めた思いや作品のテーマなどについて、制作過程の中で浮かぶ問いや考えやキーワードを、ワークシートに言葉で記録していく。作る中で、生徒は、作業に入るとそっくりに作ることに集中してしまいがちなので、そっくりに作ることだけが目的化しないように注意して作業させる。また、作品を作っていくときにどのように言葉が介在するのか、ということについても思考するように声がけをする。

#### 【作業の手順】

①授業者が用意した実際の河原の石の中から自分の模刻したいものを一つ選び、紙粘土とヘラを用意する。

②粘土で、本物の石と同じ形になるように成形する。

※実際の作品は石で制作されているが、その点は想像しながら進めること

※底面もそっくりに形作ること

③制作をしながら考えたことをワークシートに記録（言語化）する。

・作る中で浮かんだと問い と それに対する自分なりの答え

・作りながら浮かんだ キーワード（紹介に盛り込む要素）

2) 紙粘土の白い状態では重みが出ないため、三原色カラーを用いて彩色を施した。模刻に1時間、彩色に1時間と短い時間であるが、作家の考えに寄り添うことを目的にして作業をさせた。授業者の働きかけとして、造形的な指導を小松（美術科）が行い、制作の際の気づきや疑問に思ったことを考えて言語化していくための指導を畑（国語科）が行った。





【生徒のワークシート記入例】

## 作家の目線 Artist's Perspective

◆作る中で浮かんだと問い と それに対する自分なりの答え

- ・ 石と木とどっちが可なりか？  
 石はけずりだけ、木とは造りの違い。
- ・ 元の石がてきと過程どっちがどうなるか？  
 目的の有無と時間
- ・ なぜ石にしたのか？  
 石が自然にけずりたてるとは、  
 自然と石の形をたたく。
- ・ その中に偶然性があるか？  
 たまたまの偶然性がある。
- ・ なぜこの種類の石にしたのか？  
 たまたまの偶然性がある。
- ・ 制作過程は作品に入るのか？  
 テーマ次第では入ると思う。

## 作家の目線 Artist's Perspective

◆作る中で浮かんだと問いと それに対する自分なりの答え

- もとの作者はどんなものを使ったのか、  
..... 石、土、木など
- なぜ石を使ったのか、  
..... 自然物で人工的なものより作りこみやすい
- なぜ石を置く所が黒なのか  
..... 黒が映えるから
- 2つで遊ぶことに意味はあるのか、  
..... 2つが対比して見ることが出来る
- 土より遊ぶ必要性は何なのか、  
..... 土より遊ぶことで、伝わることがある
- 向玉との違いはあるのか、  
..... 一番似ている向玉?
- どうして石をもったのか、  
..... 散歩しながら河原でひらいたから
- こゝには何の美があるのか、  
..... 自然物と人工的に作る美
- 石でも色に少し違いがあるが、それは良いのか  
..... 細い一番似ている向玉にしてはいいのでは

◆作りながら浮かんだ キーワード (紹介に盛り込む要素)

美しい

同じ

自然物

石の色

向玉

難しい

散歩

土の匂い

### 3. 3 第5・6時 記述（模刻と着彩）

#### 3. 3. 1 Work3 作品「X」の紹介文2を書く

1) 模刻の経験をふまえて、再度作品「X」を紹介する文を書く（紹介文2）。作家の目線 *Artist's Perspective* をふまえて何が書けるか考え、制作のプロセスや、その中で浮かんだ問いをさらに吟味しながら書く。生徒達は、実際にそっくりに作ることの難しさを経験し、自分の中に生じる問いと格闘しながら、作品のタイトルや制作意図を検討していた。自然物の形やその形ができる過程に意識を向けていたり、自然の中に同じ形があることへ違和感について向き合っていたりと、紹介文1を書いた際とは異なる視点からアプローチしている様子が見られた。書けたところで、再び全員で互いの紹介文を共有し、初めに書いたものとも比較考察を行い、さらにそこから感じたことをワークシートに書き込む。そこでは、自分たちの視点の変化、見出される解釈の深まり、作品を考察する内容の幅の広がりなどをメタ認知したり、作る行為と起こる状況を組み合わせて考えるようになったという気づきを言い合っていた。

#### 【生徒記述タイトルの変化】

	〈 紹介文 1 〉	→	〈 紹介文 2 〉
・生徒 A	一卵性双生児	→	表面上の同一
・生徒 B	生き別れの双子	→	同じ
・生徒 C	千〇万〇	→	2つの石
・生徒 D	同じ石	→	違和感
・生徒 E	宝物	→	偽り
・生徒 F	不自然な石	→	合わせるもの・合わせられるもの
・生徒 G	影	→	未完成
・生徒 H	石・石	→	親と子
・生徒 I	真実はどっちなのか	→	自然のすごさ
・生徒 J	真偽の区別	→	真偽の区別
・生徒 K	どっちが粘土で作ったものか	→	自然への挑戦
・生徒 L	「同一」の石	→	過程
・生徒 M	1この石	→	偽物
・生徒 N	調和	→	自然への挑戦
・生徒 O	2つの石の違い	→	これは石？
・生徒 P	そろえる	→	そろえる
・生徒 Q	作品鑑賞のすすめ	→	作品鑑賞のすすめ

2) 作品「X」の作者の略歴と作品についての紹介文を資料として配付し、作品「X」の説明を行う。その上で、感じたこと、考えたことをワークシートに書く。

【作者について】

ジュゼッペ・ペノーネ Giuseppe Penone (1947 - イタリア)

1960年代後半にイタリアで起きた芸術運動、アルテ・ポーヴェラ(貧しい芸術)の一人として注目された。1960年代末から続ける石や木を使った作品が特徴。1970年に東京で開かれた「人間と物質」展で早々に日本に紹介された。1997年、2009年と大規模な個展「ジュゼッペ・ペノーネ」展が日本で開催される。世界の優れた芸術家に贈られる高松宮殿下記念世界文化賞(公益財団法人日本美術協会主催)を2014年に受賞している。

【作品について】

タイトル 《川になる 3》

1992年, 大理石, 30 × 40 × 30 cm(2 個), いわき市立美術館所蔵

床に並んだ二つの石。互いに全く瓜二つ、まるで見分けのつかない双子のようです。のざらざらとした表面やでこぼこで不均等なかたちは、ともに人の手によらない自然石のように見えます。しかし、この二つの石がここに至るまでの過程は、まるで異なっているのです。片方は、作家が川原で見つけ拾ったもの。川の流に運ばれる間に川底に砕かれ、削られてかたどられた石です。そしてもう片方は、作家が川の上流で探し当てたその石と同質の岩山から切り取った原石を、件の石とそっくりになるように彫った「石の彫刻」なのです。

地球の胎内で生まれた岩石は、太陽や風、雨に晒され、川に運ばれ、永遠に続く循環の中で「かたち」を得ていきます。ペノーネは、このダイナミックな大自然の造形こそ目指すべき真の彫刻だと考えるのです。ペノーネは、川原の石が過ごしてきた時間を思い、自分自身が川となって新たな石で川原の石のかたちを正確に刻みます。彼が手にするたがね、のみ、研磨石、サンド・ペーパーなどは、石のかたちをつくる「川の道具」なのです。

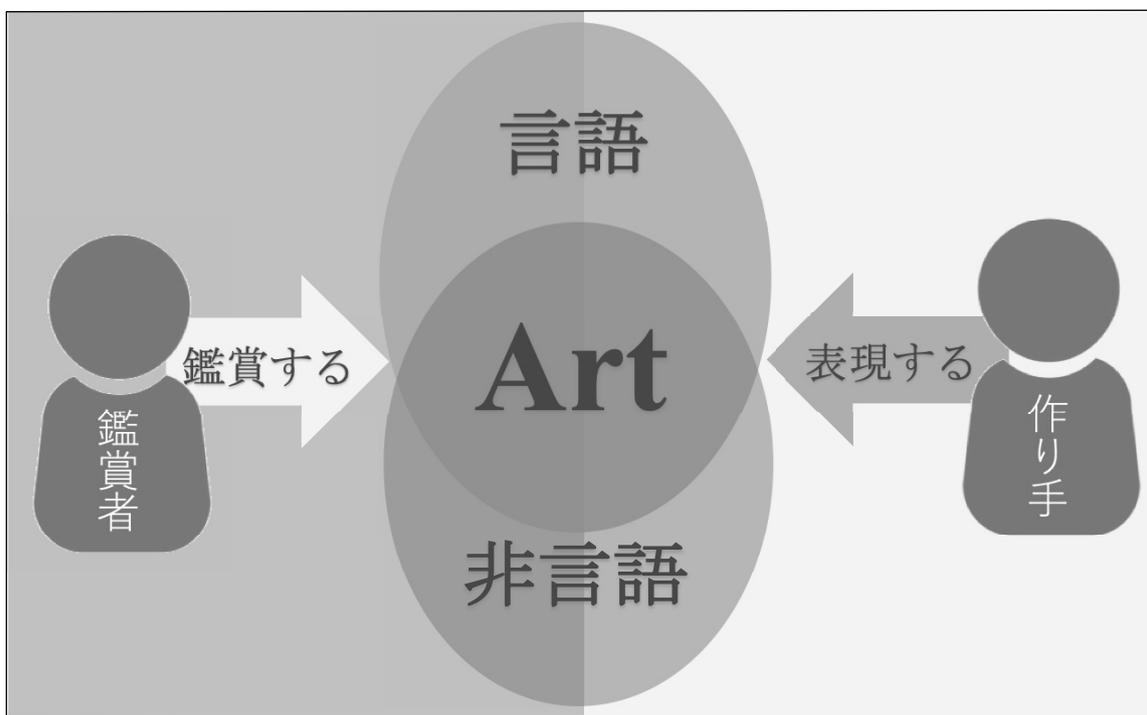
《川になる》という題名は、そのままペノーネの彫刻の意図を顕かにします。幹に巻き付けられた針金が樹木の成長の過程で樹皮に取り込まれてゆく変化を作品としたり、材木の年輪を削り出して、その芯に在る樹木の姿を削りだしたり、ジャガイモを金属製の型に入れて育てて人の耳や目、口のかたちの芋を育てたり、ペノーネは1968年のデビューの頃から一貫して自然に直接かかわり、また自分自身が自然の一部となる作品を発表し続けています。自然の中に流れる時間とその成長の過程の視覚化を試みる彼の作品は、私たちの意識を畏敬すべき自然の造形力に向かわせます。

さてさて、川原から拾った石とそれとそっくりに彫った石、どちらがどちらでしょう。展示場で、とくにご覧ください。(植田玲子)

引用: 『いわき市立美術館ニュース・58号』2014年9月25日発行 編集  
発行 いわき市立美術館

### 3. 3. 2 まとめ：講義（クロストーク）

「Art×言葉」をテーマとした美術科と国語科双方による講義と対談



1)まず、事後課題（春休みの課題）としてアートライティングに取り組むことを伝えた上で、「Art」からのアプローチとして小松（美術科）よりミニ講義を行う。

【「Art」からのミニ講義の内容】

- ①ペノーネの他の作品を紹介する。
- ②「コンセプチュアル・アート」について説明し、作品を紹介する。

・ Joseph Kosuth 1945～

「One and Three Chairs」 1965

・ 河原温 1932～2014

「DATE PAINT」

「I AM STILL ALIVE」

・ Sol LeWitt 1928～2007

「Wall Drawing」

2)次に、「言葉」からのアプローチとして畑（国語科）よりミニ講義を行う。

【「国語」からのミニ講義の内容】

- ①「視覚詩」について、作品を紹介する。

・ 草野心平 1903～1988

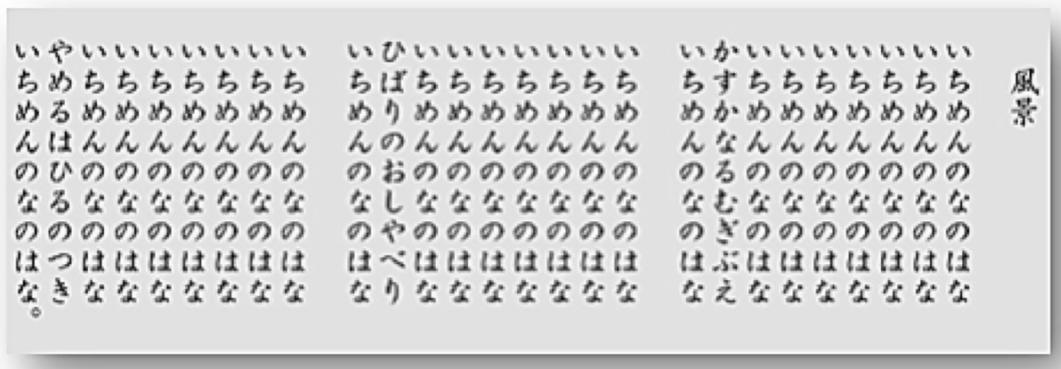
昭和期の詩人、蛙の詩で有名。

「冬眠」●、「春殖」るるる…、「天気」QQQ……

・山村暮鳥 1884～1924

明治・大正期の詩人、児童文学者。

「風景」



②「コンクリート・ポエトリー」「ヴィジュアル・ポエトリー」「プラスチック・ポエトリー」について説明し、作品を紹介する。

・E.E.Cummings 1894～1962

米国の詩人、画家、随筆家、劇作家。

「I(a leaf falls)oneliness」

・新國誠一 1925～1977

詩人、画家

・北園克衛 1902～1978

大正・昭和期の詩人、写真家、デザイナー。

### 3. 4 事後課題 (アトライティング)

事後課題として、「Art×言葉」というテーマでアトライティングを行う。「Art×言葉」をコアテーマとし、何か具体的に作品を取りあげ、体験等に基づいた 1,200 字程度の文章を書くというもの。今回の授業での取り組みやクロストークから発展させる、身近なところから題材探して考察する、など各自で 1 つのエッセイを構成して書くことを課した。下書き用紙を配布し、提出用の Google ドキュメントを Google Classroom にてデータ配布した。

#### 【アトライティングとは】

「アトライティング」という文言は、筑波大学芸術系教授の直江俊雄氏が提唱した用語である。『高等学校における美術に関する論述学習に焦点を当てた 2005 年 1 月の実態調査で等で便宜上用いた名称であり、同調査の回答者向けの説明では「美術に関する経験を、文章等を用いて人に伝えること。」との定義を示した。』と書かれている。(注)

今回の授業においては、授業での学びや経験を踏まえて、課題テーマを「アートと言葉の関係性について」とし、A4 用紙 1 枚程度の文章を課した。各々の視座から書くことを通して

考えを深めていくことを狙いとし、このような活動をアトライティングと位置付けた。  
 \*注. 引用：直江俊雄（2007 年）。「美術体験に関する論述学習—高等学校におけるアトライティングの現状と可能性—」．日本美術教育研究論集（40）3-12

つくる create produce      作品 art work  
 鑑賞する appreciate enjoy  
 見る look watch  
 解説 explanation comment  
 Art × 言葉      題名 Title  
 解釈する interpret construe

【生徒の提出したアトライティングのタイトル一覧】

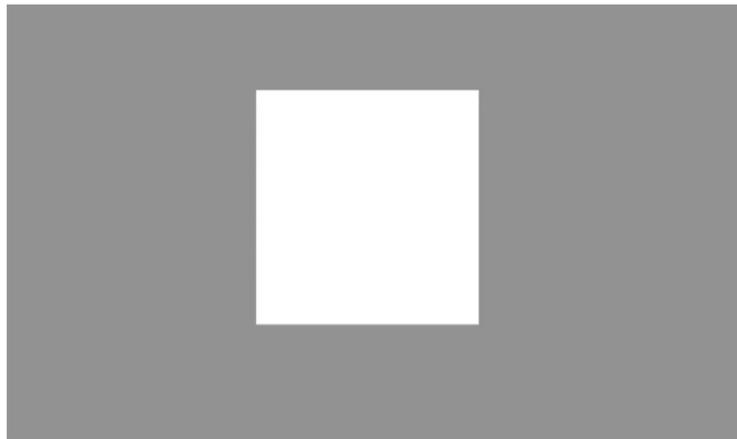
1	言葉は Art なのか。
2	芸術作品はだいたい「Art×言葉」
3	言葉と絵画の相補性
4	言葉と美術作品
5	アートと言葉の関係の奥深さ
6	絵画に文字を取り入れる～「あ」を通して～
7	考えの道しるべとなる言葉
8	ハングルのアート性
9	文字自体の美しさについて
10	現代のアートと言葉の関係
11	言葉は限定で Art は無限
12	2.5 次元ミュージカルで姿を変える「言葉」
13	アートテロリスト バンクシー
14	Art 活動に対する自己解釈とその取り組み方

### 【生徒のアートライティング例 1】

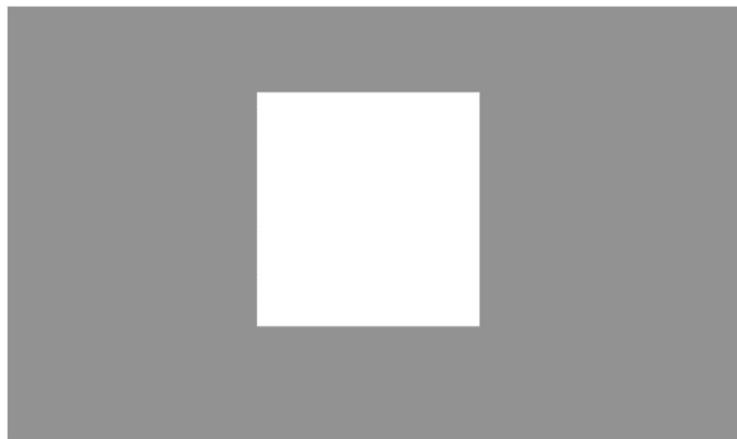
#### タイトル：言葉は Art なのか

アートといえば何を思い浮かべるかは人それぞれだろうが、アートって何と聞かれて言葉や文字のことを連想する人はごく少数であると思う。だが僕は言葉（ここでは文字自体や文字による情報のことを指すものとする）も立派なアートのうちの要素であると思う。理由は2つある。

1つ目の理由は、タイトルやキャプション、解説パネルによる印象の誘導ができるからだ。僕は Art×言葉の授業を受けるまでは「説明文やタイトルなんて結局は絵が根本にあってこそ生まれるもので、結局大事なものは絵画や美術作品だ」と考えていた。しかし今回の授業を受けてみると、タイトルなどの文字の情報は絵や美術作品と言った視覚的情報（あるいは他の五感に頼った情報）と違い鑑賞者に確実な情報を与えることができるから、鑑賞者の思考を制限、あるいは誘導することができるということがわかった。例を挙げてみよう。



これを、美術館に飾られている絵画だとしよう。鑑賞者はどんな印象を抱くだろうか。ただの白い四角形という印象しか抱かないかもしれないし、これは何かの紙だと思える人もいるかもしれない。突拍子もない空想を始める人もいるだろう。しかし、これがもしプレートがあつてこう書かれていたらどうだろう。（この例の図は、生徒自作。元の色はグレーの部分に黄色である。）

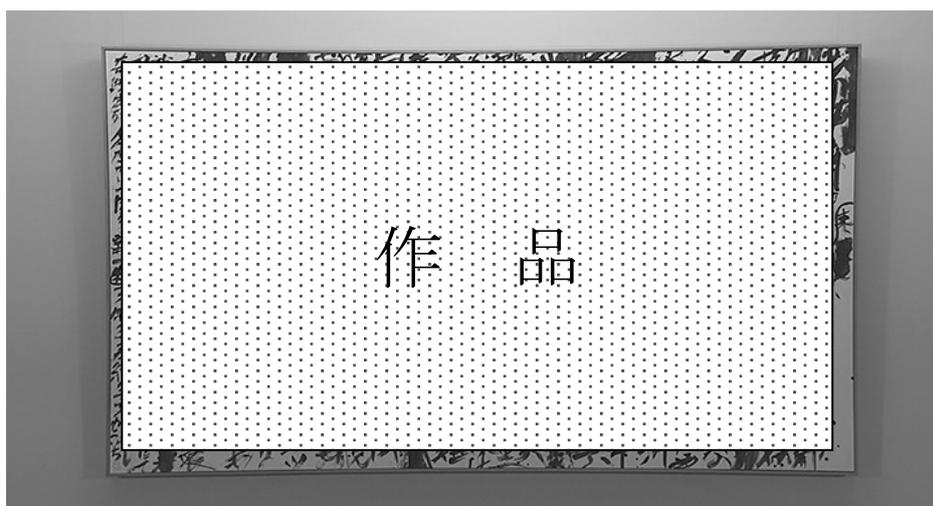


タイトル：白の立方体

印象がグッと変わったのではないだろうか。この絵画は二次元的な構造ではなく奥行きのある三次元的な構造であると、ほとんどの鑑賞者はそう考えると予想できる。また、文字による情報というのは必ず定義されているもので万人が受け取る印象というのはある程度一定であるから、確実に情報が伝わるということもわかっていただけだと思う。このタイトル、立方体を見て例えば球体を思い浮かべる人はまずいないだろう。きっとそれは立方体の意味を知らない人だけだ。無論、逆に文字の情報だけでは文字以上の情報（たとえば色や匂い、硬度など）は受け手それぞれ異なる印象を抱くだろうが、それでも伝えたい情報、ここではこの白い四角は立方体であるということは確実に伝えることができる。

このようにタイトル一つで鑑賞者の印象をたやすく、確実に誘導することができる。説明文や解説文があればさらに印象を誘導することが可能だ。つまり、美術作品を見た印象がタイトルや説明文によって誘導されるなら、もはやタイトルなどの言葉も Art の一部であるといっても過言ではないということがわかっていただけだと思う。

2つ目の理由は、文字主体の数々の作品の存在だ。畑先生もいくつか紹介してくださったが、今回は最も印象に残ったのは、井上有一の「噫横川国民学校」だ。



出典：「書家・井上有一特集のNHK番組 東京大空襲が生んだ「悲劇の傑作」に迫る」より画像を引用（2021年4月12日閲覧）

この作品は書家が書いたもので、中学の書道の時間にやるようなお手本通りの丁寧な文字を書いた作品とは全く違った様子に仕上げられているのがわかる。この作品の詳細は省くが、この作品からは並々ならぬ思いが感じられると思う。

このようにたとえ文字だけで構成されていても強い思いが込められていて、鑑賞者が様々な受け取り方ができるなら、もはやアートと言えるのではないだろうか。

以上のふたつの理由により、僕は、言葉は Art を支える重要な要素のひとつであり、また Art そのものでもあると考えた。

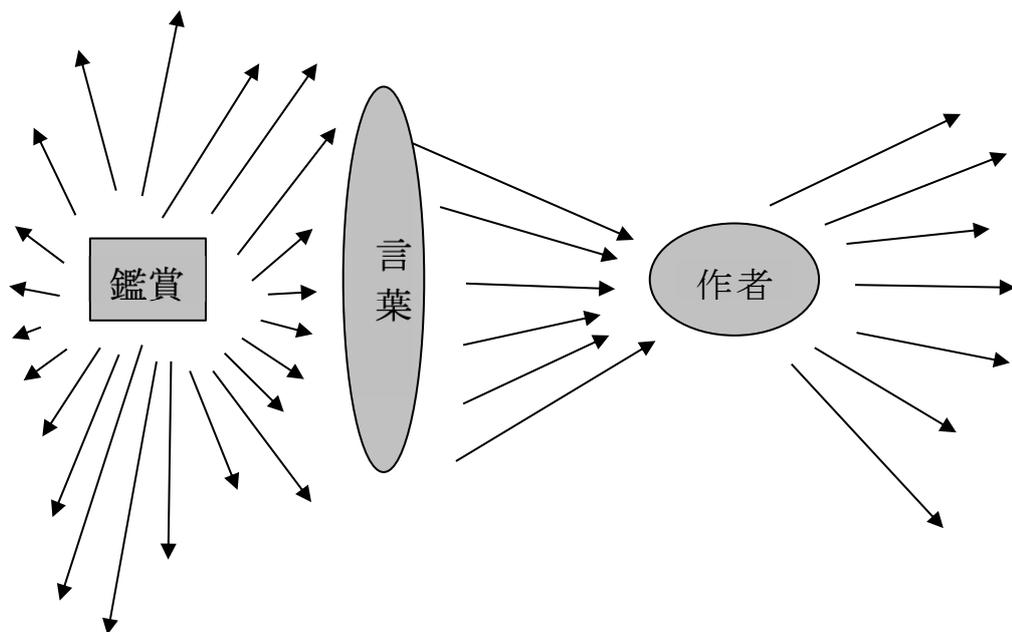
## 【生徒のアートライティング例2】

### タイトル：考えの道しるべとなる言葉

Art とは美術館などで展示されている作品だけではない。作品を作った作者、作品を作るのにもとにしたもの、作品を展示する美術館、そして作品を鑑賞するお客さんなどがいることで初めて Art というものは完成するものだ。

とくに作者と作品、鑑賞する人との関わりは Art において大切なものとなってくる。鑑賞する人はまず作品を見ていろいろな観点から作品を鑑賞し、様々なことを考察する。しかし、その考察は作者の伝えたいことかもしれないし、異なることかもしれない。もし、作者が A について表現したいと思って作った作品でも鑑賞する人が「この作品は B について言いたいのか」と誤解してしまうと、作者が望む Art は成り立たず、違った Art が生まれてしまう。

そういったことが起こらないようにするために、鑑賞する人が作者が表現したいことを感じ取ってもらうよう鑑賞の方向性を示すものが必要となってくる。それが言葉なのだと思う。



つまり、言葉とは鑑賞する人の思考を作者の意図に導いていく、いわば虫眼鏡のような役割をしている。この言葉の虫眼鏡のような機能によって作者の意図に鑑賞がなされている。もちろん、鑑賞は作者の意図を理解するだけで終わりではない。理解してそこから自分なりの考察が行われ、新たな気づきや発見が次々と生まれてくる。そしてその反応を作者が知り、次の作品における参考にしていく。この一連の流れが Art と呼べるものだと思う。

このように考えていくと言葉の重要性が大きく響いてくることがわかった。もし言葉の機能がうまく働かないと鑑賞する人を間違った方向に誘導してしまう可能性がある。

Artとは作品を通して作者と鑑賞する人の相互の理解があって成り立つべきものだ。作品だけでは鑑賞する人に作者の表現したいことが伝わるとは限らない。だからこそ言葉が作品とは違った形で鑑賞者に作者の表現したいことを伝えなければいけない。また、ストレートにいうべきことを伝えないといけないのでなるべく簡潔にわかりやすくする必要がある。

これからは作品だけではなく題名や紹介文その時代背景など作品外のこととも結びつけて作品を創作したり鑑賞したりしていきたい。そうして今まで自分が知っている美術の幅を広げ、新しい領域に踏み込んでいきたい。

### 【生徒のアートライティング例3】

#### タイトル：2.5次元ミュージカルで姿を変える「言葉」

舞台演劇は芸術のひとつだ。そして芸術は人の心に訴えかけるものだ。舞台演劇はセリフや様々な効果によって見る人の感情に迫る。そして見終わった後には余韻として見た人の心に残り続け、愛される。そのため、舞台を見てる時だけが作品に触れているときではない。観劇の前後も、また作品のことを思っているときも作品に触れているといえるのだ。

一口に舞台といっても様々なものがある。ストレートのものからミュージカル、時代劇などだ。ここから私は舞台の中でも歴史の浅い「2.5次元ミュージカル」について例に挙げて言葉との関わりを考えたいと思う。

そもそも2.5次元ミュージカルとは、漫画やゲーム、アニメなどの原作を演劇作品化したものである。そのため、劇場に足を運ぶ人には俳優のファン以外にも原作のファンがいるのだ。このことからわかるのは、普段劇場に来る機会の少ない人に支えられる作品があるということだ。2.5次元は舞台演劇の中でも非常にカジュアルなジャンルなのではないだろうか。

しかし、普段劇場に来ないような人を観劇させるにはさまざまな工夫を施す必要がある。このときに効果的な言葉やデザイン性が必要になってくる。言葉はタイトルやキャッチコピーとして、デザイン性はポスターやホームページデザインにおいて重視される。これらは、未知の作品を見に行くか考える判断材料として与えられるものなのだ。このようなものだけで見たいと思わせるには2.5次元の作品では原作の人気だけでなく公演前に与えられるもののクオリティが重視される。また「オリジナリティ」があることも伝わらなければならない。タイトルや脚本などの言葉によってオリジナリティが明確になることで、原作だけでは見えないキャラクターの内面的な部分に迫れたり、舞台化されることの意義がより鮮明になる。

そして、作品中では言葉はセリフや歌詞などに姿を変える。ここでの言葉は直接観客に届くため原作で描かれる関係性を重視して丁寧に作りこみながら見ごたえのあるものにされている。特に「ミュージカル刀剣乱舞」という作品では、刀が擬人化された刀剣男士が歴史を変えることを目論む時間遡行軍と戦う、という原作のストーリーの軸に則りながらも、史実に沿いながらさまざまな時代ごとに登場する刀剣男士を変えて作品ごとに異なるテーマ

のストーリーを上演している。またそのそれぞれに特徴的なタイトルが付いており、オリジナル脚本になっているため原作との境界が存在し原作を知らない人もストーリーを楽しみながら見ることができるのだ。

「刀剣乱舞」は公演前に見られるチラシやホームページでのストーリーのヒントがほとんどない作品だ。シリーズ内で主に幕末の時期に使われていた刀たちの物語の場合、唯一与えられた言葉でのヒントはチラシに書かれた「選ばれなかったものたちの物語——」だけだ。観に行く人の中にはキャラクターの姿を見たいからだけでなく、「選ばれなかった」ということの意味を自分なりに解釈したい人もいるのではないだろうか。

そして観劇後には作品について思い返ししながら、印象に残った言葉つなげて自分なりの解釈や感想を持ったり、わからなければ何がわからないのかを自分の中で明らかにして余韻を味わうのだ。このような作品と自分とのつながりを持つとすることが芸術と触れることに関わるのだと思う。

舞台演劇における言葉についてはまだまだ果たす役割があり、ストーリーに言及すればいくらかでも文字を羅列できてしまうが、私自身の解釈でしかなく他の考え方も差異もあるためとどめておきたいと思う。舞台に関わる言葉は考えを巡らせるときに潤滑油として働いてくれる存在だ。2.5次元ミュージカルという比較的新しい演劇の形が多くの人に親しまれている背景にも言葉による表現は関わっているのだろう。

参考 ミュージカル刀剣乱舞公式ホームページ <https://musical-toukenranbu.jp/>

閲覧日 2021年4月9日

.....

#### 4. おわりに ～今後の実践に向けて～

今回、「Artと言葉」をテーマとして取りあげ、美術科と国語科の教員のコラボレーションによる授業実践を試みたが、これはまさに、「+ (プラス)」ではなく「× (カケル)」だとうい生徒の言葉の通りであった。構想段階のブレインストーミングの時から互いの思いつきにインスピレーションを受け合い、視点の広がりの中で授業を作っていくことができたことは大変刺激的であった。各々、相手の教科・科目を鏡として、自分の教科・科目の意義や意味を改めて考え捉え直す貴重な機会ともなった。生徒たちが、今後の芸術体験や言語生活の中で自己の視点・思考を持ち、他者の視点・思考を共有し、また自己の視点・思考を進化・深化させていくのだという感覚を身につける1つの機会になり得たと言えるだろう。

しかし、実践してみた中で浮かび上がった課題や、さらなる改善の余地なども多々ある。例えば、「紹介文2」について、「第三者の鑑賞が深まるような言語表現の工夫をする」という点において、書かれた文章を生徒同士で推敲させる活動や、教員の添削などの積み重ねを入れることで、活動をより充実させることができると考える。また、まとめの課題とした「アトライティング」についても、各自が書いて終わり、という活動になってしまったが、発

表や共有活動につなげられたならば、生徒の思考をより深めることができただろう。また、本実践では、複数教科による横断型授業における評価基準の設定や、その評価方法の在り方などについては、吟味が不足している。これらは、今後の課題として、引き続き教科横断型授業の実践を継続的に試みたいと考えている。

#### 参考文献

- 1) 直江俊雄.(2007年)。「美術体験に関する論述学習—高等学校におけるアートライティングの現状と可能性—」. 日本美術教育研究論集 (40) 3-12.
- 2) 直江俊雄.(2009年)。「後期中等教育におけるアートライティング : エッセイコンテストの創設による運動展開」. 美術科教育学会誌 (30) 253-264.
- 3) 小松俊介.(2020年)。「作品制作を通じた美術鑑賞の授業実践—ジュゼッペ・ペノーネ《川になる3》の鑑賞—」. 筑波大学附属高等学校研究紀要. 第61巻 13-22.
- 4) 末永幸歩.(2020年) . 『13歳からのアート思考』. ダイヤモンド社.
- 5) Dan Rothstein, Luz Santana.(2015). 『たった一つを変えるだけ クラスも教師も自立する「質問づくり」』. 吉田新一郎(訳) .
- 6) 安齋勇樹, 塩瀬隆之.(2020年). 『問いのデザイン 創造的対話のファシリテーション』. 株式会社学芸出版社.
- 7) Philip Yanawine.(2015). 『どこからそう思う? 学力をのばす美術鑑賞 ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ』. 株式会社淡交社.
- 8) 上村博, 大辻都.(2019年). 『アートライティング1 アートを書く・文化を編む』. 京都造形大学 東北芸術工科大学 出版局藝術学舎.
- 9) Amelia Arenas.(2001年). 『みる かんがえる はなす 鑑賞教育へのヒント』. 木村哲夫(訳) . 株式会社淡交社
- 10) Amelia Arenas.(1998年). 『なぜこれがアートなの?』. 福のり子(訳) . 株式会社淡交社
- 11) Edward Estlin Cummings. (1997年) . 『カミングス詩集』. 藤富保男(訳). 思潮社
- 12) 新國誠一(2008年). 『Works1952-1977』. 思潮社
- 13) 長畑明利(2002年). 「視覚詩を読むこと - Steve McCaffery の Carnival」. 名古屋大学文学部紀要「言語文化論集」巻24, 号1, 209-221,